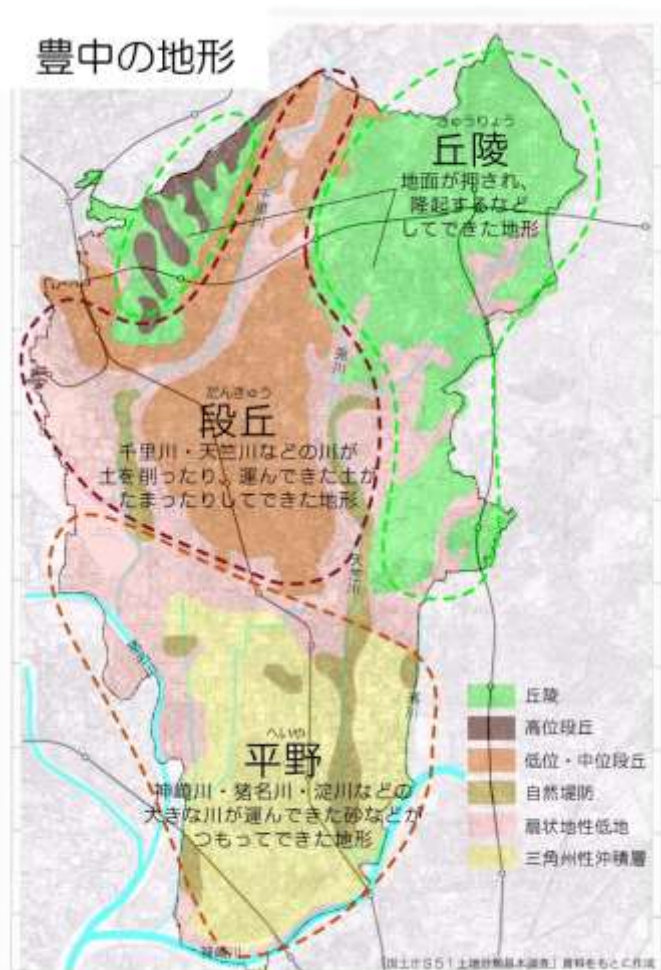


1. 景観のなりたち

本市のまちなみは、自然を基礎に、人々の暮らしや生産活動の歴史が積み重なって形成されたものであり、都市景観の形成にあたっては、これらをいかすことが大切です。

(1) 自然

- 北東部を中心に丘陵、中部の段丘、南部の平野（沖積低地）の3つの地形によってなりたち、北から南に向かって猪名川、千里川、天竺川、高川が流れ、東から西に向かって神崎川が流れています。
- かつて、丘陵や段丘にはため池が数多く分布し、平野には水路網が整っており、水田や畑のほかタケノコの生産や花桃等の園芸作物の栽培等が行われていました。丘陵には、竹林やアカマツ・コナラ等の林が分布し、豊かなみどりに囲まれていました。
- 現在は服部緑地、天竺川・高川沿い、島熊山、千里ニュータウンの公園・緑地、猪名川や千里川の河川敷等が、豊かな自然の風景に親しむことのできる貴重な資源となっています。



川沿いの緑や段丘の地形がよみとれるまちなみ



天竺川沿いの豊かな自然

(2) 市街地形成の歴史

<戦前～戦中>

- 大正時代まで、能勢街道沿いに町家が分布する以外は農地と集落が広がっていました。
- 大正から戦前にかけて、鉄道の開通に合わせた玉井町、末広町、岡町、東豊中での郊外住宅地の開発、桜塚での豊中第一土地区画整理事業によって、住宅都市の基礎が築られました。
- 猪名川沿いの平地をいかして飛行場が整備されたのもこの時期です。



<戦後～昭和 40 年代前半>

- 戦後から高度経済成長期にかけて、緑丘や永楽荘、宮山町等で開発が進む等、住宅地が全市域に拡大しました。また、庄内駅の開設にあわせて、文化住宅や小規模な戸建て住宅等が多く建設されました。
- 日本住宅公団（現 UR 都市機構）等により旭丘、東豊中等に大規模な住宅団地が建設され、千里丘陵にニュータウンが開発されました。
- 大阪国際空港や名神高速道路といった国土幹線交通網の整備も進みました。



<昭和 40 年代後半～平成初期>

- 大阪中央環状線、新御堂筋（国道 423 号）・北大阪急行、阪神高速道路大阪池田線が開通し、利便性の高い都市を形成するにつれ、ほぼ全市域にわたり市街化が進行しました。
- 骨格的な都市基盤や住環境を整えるために、阪急宝塚線連続立体交差事業、大阪モノレール事業、庄内再開発事業、空港周辺整備事業の 4 大プロジェクトを実施しました。



<平成初期以降～>

- 西泉丘や少路、野田地区において土地区画整理事業が行われました。
- 既存市街地では団地の建て替え等の更新事業も行われています。また、大規模な敷地を有する戸建住宅において敷地の分割や集合住宅の建設が見られたり、工場跡地において商業施設や集合住宅等への土地利用転換も行われるようになっていきます。



市街化の時期の凡例

- ～明治 18 年
- ～昭和 22 年
- ～昭和 42 年
- ～昭和 51 年
- ～平成初期以降

2. 景観の特性

本市は、住宅地を中心とする都市として発展し、まちづくりへの住民参加も盛んになってきました。その結果、次のような景観の特性が見られます。

①暮らしやすい生活都市

- ・戦前からの住宅地や千里ニュータウンに代表される良好な住環境、緑丘や新千里南町等の活発な市民活動等により、暮らしやすい生活都市のイメージが強い。

②モザイク状に広がる景観

- ・自然条件や市街地形成の時期等の違いによって地域ごとに異なる景観がモザイク状に広がっている。

③アクセントになる骨格的要素

- ・住宅地を中心とする市街地が面的に広がるなかで、点・線・面の景観要素がアクセントになっている。

④景観まちづくりへの取り組み

- ・景観に対する意識が高まりつつあり、住民主体による様々な景観まちづくりの活動が展開されている。

